

文体と国体の狭間で——日清戦争後の漢詩文意識の一端——

許 時 嘉

はじめに

本稿は、雑誌『精美』の編集者である大江敬香と榎山衣洲の相關關係に焦点を当て、日清戦争前後における漢詩文意識と時局の絡み合いの実態の一面を明らかにすることを目的とするものである。

日清戦争前後、中国蔑視の風潮が本来の国学者の間だけでなく、一般民衆にも普遍化していった。このような中国蔑視、欧化主義の高揚と国粹主義の出現、さらに教育勅語以後の国体の確立、という三者が合流するにつれて、「漢学」という学問は外部（洋学者、国学者等）からの圧力に

よって疑問視されていったばかりではなく、内部からの自己疎外的な傾向も生じた。支那学が漢学から切り離され、学問として独立したのは象徴的である。倉石武四郎は一九四三年五月に「漢文教育の問題」において、漢文教育と維新以来の日本の国威発揚の進展とが逆行するに至った歴史を、支那学が漢学から離脱する歴史とパラレルに捉えている⁽¹⁾。倉石が「支那語教育の発達とともに、従来の「漢文教育」はさらに縮小を見た」と述べたのは、漢学と支那学の対立に対する個人的固定観念を反映するのみならず、過去に日本語の一端を担っていた漢文が国語概念の確立に伴って、中国語教育の一部に「回帰」すべきだと考えられるようになった、という当時の社会状況を浮上させる⁽²⁾。と同時

に、倉石は、日清戦争を「久しく培われていた支那崇拜の思想……が徹底的に打ち砕かれた記念すべき時機」と定義し、「大東亜の盟主として、支那にたいし指導的地位を取る」には、「支那人を驚かすような業績をあげられた偉大な支那学者……を常に絶やさず用意しておくことは国家のため絶対に必要なことである」と述べ、支那学が国威の発揚に寄与するはずだと肯定視している。従来の認識によれば、明治期の支那学の成立が、洋学の影響を受けて、「支那」を対象化することにより、「日本」を確立しようとするナショナリズムに支えられていたこと、つまり日本主導による東アジア再編の欲望と結び付いていたことは否認し難い。こうして対象化することにより、日本近代のシノロジジーはまた高水準の学問的成果を挙げてもいた。この「漢学」をめぐる自意識の分節化は、一方ではナショナル・アイデンティティーの次元において、他方では近代的西洋文明における学問の実用性と有効性の基準とともに進行してきたといえる。

その一つの結果が、漢詩人国分青厓が日清戦中に山県有朋將軍の召に応じて清国に渡った際、詩文雑誌『精美』に載せた記事である。「清国に渡り其の健腕を振ひ以て豚奴を驚かさんとす豚奴が我が軍旗の下に哀を乞ふと共に文壇の上にも亦降旗を樹つるの日遠きに非るべし」。戦場の勝

利を狙うのみならず、文壇においても清国を倒したいという意図が文面に溢れている。日清戦争を一つの分水嶺として、それ以後東アジアの序列関係に変化が起きた。従来の中国の先導的な地位が崩れ、儒学世界における日本の位置づけを再認識する動きが始まった。

一方、日清戦争後、漢詩文の素養のある多くの政府官員、知識人たちが植民地台湾に赴いた。彼等は、特に総督府の官員の場合、漢詩文の知識を披露して台湾人知識人との唱和活動を積極的に行つたが、このような植民地の漢詩唱和活動は支配者の懐柔手段と理解されることが多かった。また、漢詩文の素養を持つ日本人官員や記者の渡台は、「(国内で)失脚した政治家やリベラリズムの学者が相次ぎ新天地の台湾にやって来た」ものと理解され、国威の宣伝のため、あるいは国内の漢詩文の衰退により新天地での漢詩文の再興を目指すためにやって来たというのが一般的認識であった。しかし近年になって、黄美娥や陳培豊、齋藤希史が東アジア漢字文化圏に共通する漢詩文の「同文」性に基づき、漢詩文を用いて植民地で同化政策を行つた統治者の可能性と限界性を明らかにする代表的研究を次々と発表している。この漢詩文自体に起きた制限的な現象が何を示唆しているのか。以下ではこうした同文の伝統と前述した「漢学」をめぐる自意識の顕在化をあわせて想起すること

により、この自意識が同じ漢詩文の伝統をもって植民地台湾に渡った日本人漢詩人自身の詩文創作態度にどのような反映していたのかという問題を日本内地の漢学観の変化及びその変化が漢詩文意識に及ぼした影響と絡めて再考してみたい。

一、漢文脈から「我文脈」へ

——文体の置換及び日本の主体性の浮上

日清戦争期の排漢字・漢文論の中に現れた漢学者たちの反論を探ってみれば、漢学が日本人にとって不可欠のものであり、中国に対する敵視感情をそのまま漢学に向けてはならないと強調する言説がよく見られる。湯本武比古は『精美』に「漢学の我国に於けるは希臘羅甸の西洋諸国に於けるが如く君子の学問として決して廃すべからざる者なり」と述べ、漢学素養が日本人にとって如何に重要であるかを示した。湯本によれば、西洋の精神世界がギリシア・ローマ時代の学問や哲理によって構成されることと同様に、日本の漢学は正しく君子の精神的、倫理的思想を養成する学問として位置づけられるべきである。漢文の中には教えとなるべき聖賢の言が多いため、漢文の素養を持つことにより、漢籍における先賢の教えが理解できるばかりでなく、一般の知識に加えて道徳観と倫理観も育てられ

るのである。

また当時、訓読の訓練を必要とする漢文は和文よりも外国語に近い、学校教育から除かなければ学生に負担がかかる一方である、などの言論が教育界に広がっていた。しばしば指摘されたその漢文体の異質性に対して、湯本は次のように反論している。

凡そ思想の異なりたる語を学ぶは実に心志を練るに価値ある者なり我人が文法の全く異なりたる漢文欧文を讀むは思想修練上極めて価値あり(傍線、筆者)

湯本は幼稚な小学校教育においては漢文の授業を廃止してもよいが、高等普通教育では漢字の練習のみならず、漢文を自由に書き得る能力が養われるべきである、という。彼は、学生の漢文に触れる時期を小学校から中学校に繰り上げ、中学校における漢文科の授業を学問の一環として一層重要視するのである。

ところが、漢学を「君子の学問」として定義し、漢文の精神性を重んずる一面が見られる一方で、湯本には漢文を欧文と同等の地位に置き、「思想の異なりたる語」として日本語から周縁化させる一面もあった。本来的に言語機能の意思／音声の組合せとは別の次元の、〈知識としての普遍性／学問としての固有性〉という二つの柱に支えられていた漢文ではあるが、「語」という漢文の機能が浮上す

ることによって、かつての学問上の特権的意味が色褪せ、内的思想と外的文体という二つの要素が分けて考えられるようになった。⁽¹⁵⁾「語」として定義されたその瞬間から、漢語を綴ることによって構成される漢文はそもそも思想そのものではなく、むしろ思想を伝達する一種の用具と見なされ、機能主義的に捉えられるようになったのである。

漢語の機能性に注目する現象は、明治二十年代前後の言文一致の論説に既に現れていた。言文一致運動の経緯を綿密に考察する著作、山本正秀『近代文体発生の史的研究』に取り上げられたいくつかの事例にはこうした傾向が見られる。⁽¹⁶⁾ここですぐに想起されるのは、平易な仮名文を提唱した前島密、清水卯三郎や、文章の言文一致を実現する上で洋字採用の有利を唱えた西周が共に、表記において漢字の形態としての繁雑さを痛感し、平仮名やアルファベットの使用を代替物として提起したことである。漢字は、従来の学問上神聖で、卓越した地位から単なる意思伝達的手段に過ぎない機能主義的な道具に転落し、他の言語記号と代替可能なものに成り下がったのである。これらの漢字廃止論は、過去の「ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥の跡を見るのみ人の道かは」(荷田春満)のような、国学者の間で起ったナショナル・アイデンティティーの反漢学的な執着とは異なる次元を呈していた。こうした漢字漢語観の解体が後

に田口卯吉の「意匠論」に辿り着くのは必然の結果である。田口は一八八五年八月に『東京経済雑誌』に連載した「意匠論」において、「文学の味は文体にあらざりて其意匠にあり若し其意匠を貴はん乎普通の言語を以て記すること最も自由なるべけれ」と述べ、旧来の漢文を用いるのは雅である、という美文本位の文章観から文学の趣味を解放し、「新思想」を思うまま表現できることこそ重要であると主張している。⁽¹⁷⁾田口の本来の考え方は口語に近い文体を提唱する所にあるとはいえ、こうした文の〈形〉よりも内容を大切にすることを、漢字の世界を簡単に切捨てて自分自身をローマ字の世界に飛び込ませることはできなかつたに違いない。⁽¹⁸⁾

一方、漢語の機能性に注目する立場からすれば、漢字漢語不可廃論の出現は面白い対照をなしている。『経国美談』の著者、矢野龍溪は一八八六年三月に発表した『日本本文字新論』において、複数音節から構成される日本語と比べて「短声急声」で発音する漢語を用いることは便利さを求める「言語の理」に相応しいと述べ、意思伝達を重視する一般の新聞文章や教育書、政府の布告など普通書向けの漢字節減には賛成するが、全面的な漢語廃止に反対している。⁽¹⁹⁾また、口で表現する口語文の世界は耳に親しい冗長な常語を指すのに対し、目で読む書物の世界に求められ

るのは見るのに形短く一氣にその意味を解説する表現である、という¹⁸⁾。要するに、漢語の短縮された発音とコンパクトな字形は仮名よりも明らかに便利であると矢野は主張している。矢野は明治の口語表現の冗長性、敬語表現の繁雑さ、明治期標準語の未熟さ、文章上の表現と口語上の表現の差異性に訴えて言文一致尚早の立場を表明すると同時に、機能主義から漢語の利便性を捉えることにより、従来の漢字漢語の風雅やイデオロギー性を重視する立場から一線を画した¹⁹⁾。こうした精神論的イデオロギー性から機能主義的な用具性への転換には、カッシーラーの言うような「実体概念―機能概念」の二項分裂が見え隠れしている²⁰⁾。漢文漢語をある種の用具と見てその機能性が注目されることは、従来漢文が持ちえた精神性（例えばナショナル・アイデンティティー、あるいは日本文化における漢文漢語の実体性など）の相対化を予告しているのである。

漢文の機能性を重視する立場の別形態は市村瓚次郎の論説に見られる。市村はこの一年前に「日本固有の言語の性質は優美なれども弱に近き所あり」と指摘し、「漢文の長を以て国文の短を補ふは今日の文学上に於て最必要なる所とす²¹⁾」と論じていた。中学校教育における漢文の重要性に對して、彼は次のように述べている。

嗚呼特別なる国民の智徳を養ふ具となり、東洋人間た

る觀念を誘起し、以て我が徳性を養ふに足り、以て我が文学を助くるに足る者、漢文を捨て、何者かある²²⁾
(傍線、筆者)

市村は漢文を「特別なる国民の智徳を養ふ具」と定義している。漢文が東洋人たる觀念の養成や徳性の涵養に不可欠のものである限り、漢文の習得がまず必要とされる。なぜなら、それは漢文で書かれた中国や日本古典の知的世界を理解するための重要な手段であるからだ、と市村は考えている。しかしここでは漢文を「智徳を養う具」と喩えることに注目しなければならぬ。「智徳を養う具」と喩えることは漢文を知識と徳性の形成に不可欠なものとして認めながらも、その「具」という言い方が「媒体」「道具」にすぎないという漢文のもう一つの面を意味している。意味深いのは、漢文がその道具の機能性として重要視される一方、「君子の学問」を求めるとすれば、必ずしも漢文を経由しなくてもよいという他の言語との置換可能性も曝け出されてしまうことである。

では、他の言語とは何を指しているのだろうか。文部大臣井上毅の発言からこれに対する答えを見つけることができるかもしれない。前述したように、日本の固有精神を含む漢学の価値は、中国への敵視感情と日本文化の本質に漢語漢字が内在するという事実認識が絡み合いながら、再確

認、再認識され、教育制度の一環として組み込まれる。だが、日本ナシヨナリズムが急速に発展する一八九〇年代に至って、読み下す訓練を習得しなければ理解できないという漢文の異質性は「日本語意識」の生成を妨げる最初の障壁ともなった。井上毅は漢文教育に言及する際、中国の經学（哲学を指す）が倫理道德のために必要であり、また中国の文字は国語の素材として必要であることを明言しているが、従来の漢文教育は「賦詩作文の教科」と誤解され、「漢文模擬の夢」から目覚めることができなかった、ともいう。²⁰ 彼は「漢文と国文とは語法語格全く異なるが故に、漢学を用ゐながら、漢文を模擬する必要なきなり」²¹ 「漢文を作らざるも、漢書を読み、漢字を用ゐることを妨げざるべし」と主張している。²² さらに、彼は落合直文、小中村義象ら国文学者たちとの国文についての議論の中で、国文の言詞は漢語、漢字、西洋語であるにしても、「文脈は日本文脈であるべし」という結論に至っている。²³ 漢字、漢語熟語を用いても、洋語を用いても、国文は妨げられない。ただし、これらの漢語や洋語、和語を連結する際に、漢文脈に支配されず、また洋文脈にも支配されず、古代より今日に至るまで多少の変遷を経ても一貫して保持されてきた日本文脈の下に用いられるべきだとするのである。『帝國文学』の論者たちは次のように解釈している。

用語の古今内外を問はず、苟くも我文脈の下に用ゐらるゝものは皆国文なり²⁴（傍点、原文）

ここにおいて、「外」という用語の異質性があつたとしても、「我文脈（日本文脈）」に読み下されるものならばすべては国文といえる、という「文体すなわち国体」の思考が示されている。齋藤希史は明治国民の文体の成立について言及する際、今体文としての訓読文の成立が言文一致体の成立よりも基本であると鋭く指摘した。明治期の山路愛山と徳富蘇峰が『日本外史』の漢詩文を「支那」のもの、「不自由なる漢文」として認識しているのは、頼山陽の時代においては漢文で著述するのは当たり前であつたことをすっかり忘れていたと共に、過去にあつた漢文の普遍性が明治期に訓読文として代えられたのであつた、という。²⁵ 明治の近代国家形成過程において、「訓読文体」という形は、漢字漢語の高い機能を保持しつつ、漢文の精神世界から離脱するための方舟となつた」と齋藤は明確に強調している。²⁶ その延長線に立ち、「我文脈」の重要性が注目される一方、漢文による学問（漢学）の普遍性は過去のものと思なされ、漢文は漢語漢字という「語」のレベルの用具的・機能的な一面に還元されるようになったといえるであろう。漢文は表面的には漢学の基礎として従来より一層幅広く国民教育に導入されたように見えるにもかかわらず、漢文脈を強制

的な意識をもって和文脈に置き換えねばならない、という一種の国民化が成し遂げられるのである。漢語漢文はもはや実体的にはなく、道具重視の機能主義から捉えられることよって、その内部からの変質が果たされ、形式的命脈を保つと同時に、新たな国家主義と国民イデオロギーを取り込む余裕を得ることになった。

二、漢詩文の実体性と機能性の混乱

——大江敬香を例として

排漢字・漢文の動きの中で、意思伝達上の漢文の難解さに対する批判や文章体の品格から見た漢文体の不可欠性から、ナショナル・アイデンティティーへの配慮に基づく和文体と漢文体の選択の問題に至るまで、多くの論争が漢学の価値と位置づけを多義的に動揺させていた。大町桂月などの詩人が擬古的な和文に雅語・漢語を交えた叙情的・耽美的、一種浪漫的な文章を唱えて美文を流行させると同時に、漢字を主とし、仮名を客とする時文論も登場した。

漢詩人である大江敬香はその代表者の一人である。敬香は一八九一年から一八九二年の間に漢文の特質と重要性を絶えず強調していた。西洋の思想を吸収しながらも「外国の文字は内国の人士に不必要なる」と明言し、翻訳院の設立を熱心に建議した。洋学を漢文の伝統において表現しよ

うとする敬香の思考は中江兆民と合致するようにみえる。兆民は『民約訳解』をほかならぬ漢文で記し、原著の趣意をできるかぎり儒学的思考の文脈に移そうと苦心した。彼が西欧から摂取した新しい思想や知識を在来の伝統的な思想や教養と結びつけたのは、「明治人の精神として文字どおり血となり肉と化する」ためであった。それと同様に敬香にとつて、西洋の蟹文字はあくまでも外国の文字である。もし今後漢文を洋学の翻訳に応用すれば、漢文の将来は洋学との融合によって広がっていく。ここでの漢文は、蟹文字の西洋を相対化する立場から、東洋文化の固有性を重んずるイデオロギー的な存在とされている。

一方、彼は時文の成立条件を通俗性と高雅性の兼備と主張してもいる。日常公私の利便性を重んずるのは時文の特徴であり、中国人の俗文や日本人の片仮名交じり文から、小学校の児童の作文や大学の卒業論文に至るまで、何れも時文の類といえる。しかし、時文は尋常通俗の性格を持つにも関わらず、「真正の時文ヲ作ルハ真正ノ漢文ヲ作ル者ニ非ザレバ決シテ其实ヲ写ス能ハサルナリ」と敬香は強調する。時文の構成には「漢字ハ主ナリ、仮名ハ客」であるため、真正の時文を作るには漢文の素養が必要となる。敬香はかねてから「文章ノ妙用ハ達意ニアリト雖トモ文章佳ナラサレバ遂ニ達意ノ真機ヲ発露スルコト能ハサル可シ」

と主張していた。内包する思想と現出する形式は美しい文章に不可欠の構成要素であり、内容がいくら機微や才気を含んでいても、流暢練達の形式で表現されていなければ、その真意が読者に伝わらない、と彼は考えている。彼はさらに西洋の思想と漢文体との結合を強調し、「泰西的思想其脳裡ニ存セサル可ラス支那的文章亦其手中ニ存セサル可ラズ」という。彼によれば、泰西思想がいかに「斬新奇警」であつても、それを表す文章が拙劣で幼稚であれば、人に「厭倦ノ念ヲ生セシムル」。言い換えれば、この「支那的文章」は（おそらく広義の漢字仮名交り文そのものを指すと思われる）西洋思想をうまく表現するために不可欠の道具でもある。従来そのイデオロギー的な地位が強く意識されてきた漢文は、今や西洋思想をのせる道具として認識され、「形而下」の意味がここで再発見されたのである。

敬香にとつては、漢文は時に実体的に認識されるものであり、また機能的に捉えられる存在でもあった。このような定義の混乱ないしは御都合主義的矛盾は、敬香の言論にはつきりと見て取れる。漢文の機能性は和文脈に置き換えられるので、和文脈は漢字漢語の機能性を保ちながら従来の漢文から独立し、日本国民の文体として定着していく、という一連の分節化の運動がここには見られる。だが、その変容は「漢文漢学の重視」という曖昧で皮相的な標語の

背後に隠されたままなのである。敬香の言論に露呈した定義の混乱はおそらくこの分節化の過程を無意識に表現したものではないか。

一方、漢文に対して開明的な態度を示す敬香は、漢詩に對しては却つて慎重な態度を示している。日清戦争前後、漢詩壇が一時的に盛んになった。当時、漢詩人の間には戦争記念の詩が多数作られ、戦争報道雑誌に掲載された。誰もが争つて詩学作法書『詩韻含英』を読み耽る光景さえあった。しかし、それらの詩作は数量が増えたとはいえ、その多くは品質が「粗笨乱雑」であり、名家と称される詩人さえこの時期は作品らしい作品を発表していないと酷評されている。敬香は品質の粗雑さに対して、「今日詩文ニ従事スルモノ多クハ詩ノ思想ヲ養フガ為ニ唐詩選ノ講義ヲ讀ムニ非ズ、文ノ思想ヲ養ウガ為ニ文章規範ノ詳解ヲ繙クニ非ズ、唯流行ヲ追フテ其ノ後レサランコトヲ憂フル者ナレバナリ」と分析している。古典詩や文章規範を読むことは詩人としての基本であるのに、それをしない詩人が多数を占めている。その結果、名家は生まれず、単に作家・作品の数が増えるだけなのである。

この漢詩の流行と質の低下は日清戦争の勃発とともに突然生じたものではなく、以前から存在していた。敬香は一八九一年という早い時点で既にこのような現象を指摘して

いる。多くの漢学者たちは漢詩の将来に触れて、詩を作る青年世代は増えてきたが、清新な詩作がなかなか現れず、漢詩界の発展が先細りになるのではないかと心配している。しかし敬香は漢学に対する開放的な態度から一転し、発展の規模が縮小することは漢詩の品格を保つ良法であると主張する⁽⁴³⁾。彼によれば、今日のように流行し続ければ、詩作の数だけが増し、その質が保てなくなる、ある程度まで規模を縮小することで、詩作の質を確保し、漢詩の崇高な文学的地位が維持できる、というのである。実用性を重んずる漢文、芸術性を重んずる漢詩。彼は漢文における精神性と機能性の混合を無意識に感じとる一方で、漢学固有の精神性を求める場合には漢詩の方に接近していく。漢詩の質の低下を目の当りにした彼は、漢詩の崇高性を守るという切迫した義務を感じているようである。

このような錯綜した性格は、植民地台湾の新天地での漢詩活動に対する態度にも影響を与えた。一八九八年十二月、漢詩人榎山衣洲は『台湾日日新報』社主の守屋善兵衛に漢文部の主任として招聘され、台湾で急死した阪部春燈の後任として渡台する⁽⁴⁴⁾。衣洲は台湾に渡っても、時々大江敬香主宰の『花香月影』に寄稿しており、東京に一時帰省中に敬香主催の花月会に足を運び、敬香と親しい関係を保ち続けていた。敬香は衣洲の渡台前に、彼の渡台の決意を高く

評価し、「宜シク声色ヲ慎ミ風土ノ異ナル身ヲ愛スルヲ要ス任重クシテ道遠シ君夫レ之ヲ考察セヨ」と忠告を与えた⁽⁴⁵⁾。国家主義的色彩の濃厚な時代に、「任重クシテ道遠シ」という忠告には、国家のために植民地開拓の任務を常に重要視しなければならぬという敬香の老婆心が読み取れる。

一八九九年七月、衣洲は一時東京に戻った折に、「花月会」同人主催の歓迎会に招かれた。衣洲の意気盛んな有様は友人間によく伝わっており、多くは衣洲の栄達を喜んで励ました⁽⁴⁶⁾。田辺蓮舟はその一人であった。彼は衣洲が兎玉の知遇を得て南菜園に寓するまでになったことを知り、「冀北如聞逢伯樂。不妨昂首一長鳴（君が冀北の野で一人の伯樂に逢ったという話が耳に入った。君は自ら首を上げて長鳴きして伯樂の重用に答えてみないか）」と衣洲を鼓舞した⁽⁴⁷⁾。後の一九〇〇年から一九〇一年に、蓮舟は衣洲との文通の中で亀谷省軒、依田学海などの文章の大家が皆年老い、詩文壇に後継者のない有様を憂えて、「漢人視為化外。文人騷客記之詠之無幾」の台湾に滞在する衣洲に、台湾で文章の大業を成し、新天地を開拓するようにと激励している⁽⁴⁸⁾。また、蓮舟と衣洲の文通が『花香月影』に掲載された際に、大江敬香は批評者として、「（蓮舟の）忠告が極めて慇懃である。衣洲の任も一層重くなった」（傍点、筆者）と評し、衣洲に台湾で文章不朽の大業を成し遂げるように勧めている。蓮

舟の慇懃な勧告であれ、敬香の再三の確認であれ、何れも衣洲の責務重大を言うものである。所謂「文章は経国の大業、不朽の盛事」とは、文章は国を治めるための重大な事業であり、永久に朽ちることのない盛大な仕事であること述べている。この中国古典からの教えが、文章の任を国家の任と繋げるのである。

帝国統治者の立場に立った台湾人紳士との漢詩唱和活動は、台湾人を懐柔する意図が確かに強かった。ところが、日本内地から台湾に渡ってきた日本人漢詩人にとつて、彼らが背負った「任」とは、国威宣伝の任務であり、漢詩文再興の使命感でもあったという事実は注目し値する。特に、官員や総督府の職員としてではなく、在野の記者および漢詩人として渡台した榎山衣洲の場合には、「化外」の台湾で漢詩文復興活動に大いに尽力してほしいと内地漢詩人たちが寄せた期待は大きかったのである。明治ナショナリズムの下に皇国の栄光を喧伝する任務を負った彼らは「帝国協力の加担者」であるように見えながら、「任重クシテ道遠シ」というその言葉の中に「国家意識」のみならず、文章不朽という彼らの漢学意識が混じりあっている。そして、国語と国体の一致が次第に強要されていく明治日本のナショナリズムに満ちた栄光の中で、彼等の漢詩文への執着は必然的に国体との齟齬を曝け出している。

三、和臭への自戒——「規範」を目指す自意識

明六社の同人である西村茂樹は、「此国ニ在リテ他国ノ文章ヲ学ブガ故ニ到底文章ノ真ノ巧拙ヲ知ルコト能ハズ……畢竟言語ノ国ノ人ニシテ文字ノ国ノ文ヲ学ビ、其音韻モ異ナリ排置ノ順序モ異ナル所ノ文章ヲ書クコトナレバ、其真ノ巧拙ヲ知ルコト能ハザルハ怪ムニ足ル者ナシ」と日本人が漢詩文を作る際に避けられない困難を如実に示した。西村の論の如く、日本人が漢詩文によつて如何に本物に追いつこうとしても、「和臭」を脱却するのは不可能である。神田喜一郎の定義によれば、和臭とは、「日本人に特に通有する発想法とか表現法とかいうもののほか、日本語の言語的性格から来る構文上の欠陥とか、漢字の和訓に基づく漢字の誤った使用とか、日本人の漢詩文に見出される一切の日本人らしい特徴を指して」いる。⁵⁰それゆえ、和風表現が詩文の随所に見られるのは当然である。こうした中で、平安朝の菅原道真や江戸期の頼山陽のように、わざと和臭の漂う字句を用い、中国を模倣する態度に甘んじない人物も稀ではなかった。⁵¹

他方、この「和臭」の問題は、近世江戸時代の詩論書でしきりに論議され、各自の詩文表現の優劣は実に中国のそ

れを基本として、大きな批判の対象ともなった。こうした批判意識は日清戦争後に至っても存在している。例えば永井荷風の漢詩の師である岩溪裳川は、目下の漢詩は和臭や俗臭まみれであると厳しく批判し、「余頃日益友社の紹介にて初学者の詩を観るに、往々其稿を手にすれば異臭紛として鼻を撲ち、之を読むに及で腐気満紙、殆ど為めに一斗の酸液を嘔出せしむる者あり。其臭たる兩種あり、一は俗臭とし一は和臭とす」と述べ、こんな作品なら「一批半圈」すら与える価値はないと明言している。そして和臭発生の理由は従来の漢詩教育に弊害があり、「教ゆる者も亦浅近入り易きを以て、先づ課するに邦人の詩を以てし、諷誦の間、浸潤して其臭を人々肺腑の中に沁入し、遂に医す可らざるの痼疾を醸成す」と指摘している。⁽⁵²⁾ 元々和臭は、日本人よりも中国人のほうが敏感であり、また嫌悪すべきはずのものである。しかし、荻生徂徠が和臭を戒めることを重要な課題として以来、和臭は漢詩家たちの自戒の対象となったようである。岩溪裳川の和臭嫌悪はまさにその自戒現象を赤裸々に物語る代表例といえよう。和臭を自戒するかしないかという反応自体に漢詩文の「実体化―機能化」という二項性の潜在が反映している。漢詩文を精神論的イデオロギーの立場から捉えることによつて、「和臭」という要素の介入が漢詩文らしさの崩壊を招くと岩溪は考

えざるを得なかったのではないか。

靛山衣洲は台北の滞在生活の内容をもとに一連の漢詩を創作し、それらの作品がほぼ同時に『花香月影』にも掲載されている。『花香月影』四十九号に寄せた六編の詩作は台北南菜園で過した日常を描くものである。これらの作品に対して敬香は、衣洲の筆を借りて南島の景色が目の前に再現され、「真個漢客口吻(53)（真たる漢客の口ぶりによるものといえよ）」と評価した。三ヶ月後、南菜園の日常的情景を主題とする詩作が再び登場した。台湾特有の風景を織り込んだ衣洲の作品に対して、大江敬香は、台北の風景が目の前に如実に現れるようだと言絶賛し、「台北風景宛在眼。以雋永瀟洒勝。是衣洲擅場。説到絶句毫無邦人習氣。吾豈得不推賞乎（衣洲の雋秀瀟洒に勝るものはなく、これは彼の独擅場だろう。絶句とはいえ、邦人の気習は全くなく、吾も推賞するものである）」と述べた。⁽⁵⁴⁾ 台湾の風景に触れる作品に限らず、地元(55)の風景を描かないものに対しても、「頗有漢客口吻。移居気者非也（頗る漢客の口ぶりで、さすが台湾に移住した者だ）」と評した。台湾に移住した衣洲の詩文のすぐれた美点とは、日本人の気習が見られないところであると彼は考え、優れた漢詩文を判断する条件として和臭の有無を常に意識せざるをえなかつたことが分かる。

このような「中国もの」に譬えるという褒め方は、靛山

衣洲の詩作に限らず、古くから日本の漢詩界の常識であった。例えば田辺蓮舟の「題講試餘撰後」は、依田学海に「字法章法。絶是漢人手段。吾邦才子。決不得得(56)言葉の綴り方や文章の組み方はまるで漢人の手によるものようだ。わが国の才子なら決して出来ない」と評され、大江敬香にも「蓮翁詩文。頗有漢客筆致。蓋得力於燕京駐劄之日者非耶(57)蓮翁の詩文は頗る漢客の筆致を備えている。さすがに昔時に北京に駐在した経験を持つ者だ」と高く評価される。『花香月影』の中には、「彷彿漢客(漢人の如く)」「有唐初之音(唐の音がする)」「極肖南宋人(南宋人の作品に酷似する)」「清人口吻(清国人の語る如く)」などの賛辞も頻繁に見られる。すぐれた作品は、しばしば歐陽修、韓愈、白楽天など文章の巨匠、あるいは高青邱、呉麟徵、陳維崧、王士禎、袁祖志など明清の詩人詞人の傑作に譬えられている。一方、詩人としての日本人は成島柳北以外に一人も挙げられることがなかった。すなわち、中国の名文家の魂が乗り移ったかのような文章を書ければ、美文や傑作といえる価値が備わり、こうして誉められた日本人漢詩文家も無上の喜びと光栄を感じるわけである。中国の古典をキャンオンとする漢詩文意識は早い時期から既にあつたが、明治期の「中国蔑視」がどれほど盛んになつても、漢詩のキャンオンが中国の古典にあるという価値観は飽くまで変わらなかつた。

艮山衣洲の詩作における「和臭」の有無については措くとして、ここでは漢詩の創作時における彼の自意識について分析してみたい。一八九九年十二月、衣洲は二日間にとつて台湾日日新報の文芸欄に詩作と批評を掲載した(58)。ここで台湾人詩人への評語の原文は「窓外放眼衆山低。似此意興。宜求是雌黄之外」となつていたが、翌日すぐに、「前号衣洲の詩作における「頽唐」を「飄零」に、評語における「雌黄」を「驪黄」に」訂正するという記事が掲載された。「頽唐」は「くずれ衰えること」の意味で、衣洲はそれを「落ちぶれること」の「飄零」に訂正したのである。また、「雌黄」とは「石黄を用いて詩文を改竄したり、添削したりすること」だから、前後句との繋がりからみれば、意味不明で、明らかに誤用である。後で訂正した「驪黄」は中国典故の「牝牡驪黄」という言葉に由来するもので、「うわべ」「外見」を意味している。こうして訂正後の文章は、眼前の風景は単なるうわべだけのもので、裏の真実を求めよう、という衣洲の意図した意味になった。渡台の漢詩人たちは立派な文章をもつて台湾人紳士を畏服させようとしている。しかし、正しい表現と言葉使いを常に意識し、何度も吟味、検討し、必要に応じて訂正しなければならぬ。言い換えれば、立派な文章とは中国語の規範的文體と漢字表現に最も近づいたものでなければならぬ、

という自己検閲的な意識を彼らは常に持つていたように見える。日本国威の栄光を強調する時代性に即して見れば、中国古典に対するキャノン意識が生み出した「和臭」への自戒とそれを断ち切ることができない漢詩人たちの葛藤はまるで時代錯誤の風景のように見える。規範性(キャノン)への自意識が政経的側面(統治者としての権威の証し)と審美的側面(和臭の排除による漢詩らしさの完成)の二重性を帯びる特徴は、日本人漢詩文家の規範意識と漢詩文再興の動機を一層複雑化したのである。

漢詩文能力を「植民者の武器」として同じ中国の文の伝統を持つ台湾人の前に披露し、台湾人を畏服させ、同化させようとすれば、こういうキャノンに拘束される意識は同時に彼らの征服者としての意識を動揺させる大きな要因ともなる。明治ナシヨナリズムの風潮の中で、漢詩人たちは皇国の栄光を喧伝する任務と理想を持ちながらも、漢学者の伝統的性格に囚われて、「文章は国を治めるための重大な事業である」という文章と国家の不可分の関係を常に強調した。「文」の責任と国家意識を結合することによって、植民地で文芸活動を行うという彼らの行動は当然統治政権と二重視された。その結果、国文体を重んずる日本ナシヨナリズムの中で帝国の威光が宣伝される時代にあつて、漢詩の規範意識を固持し、「和臭」に対する強固たる警戒心

をもつ日本漢詩人たちは、征服者／漢学者として神経を尖らざるをえなかつたのである。

おわりに

領台初期、日本漢詩人は如何なる社会背景を担い、如何なる漢学的素養をもつて台湾に赴き、漢詩活動を行つていたのでろうか。この問題の真相が曖昧なままであるために、総督府主導の漢詩唱和活動と植民地支配との因果関係を解釈する視点と方向はしばしば動揺している。⁽⁸³⁾ 以上において日清戦争期の漢字・漢文論争における漢語漢文の(実体化―機能化)の過程から大江敬香の漢詩文観と靛山衣洲の植民地詩文活動における文体／国体の二重性を例にとり、帝国の拡張過程における日本人漢詩人の位置について考察を試みた。東洋に共通する漢学は中国の産物であつたにもかかわらず、日清戦争における中国敗北の事実と日本にとつての漢学の不可欠性の認識が交錯する中で、漢学界には(中国に由来する漢学)を(日本によって再興される漢学)として位置づけ直す趨勢が生じた。明治の漢学者は日清戦争を通して漢学の日本化を果たし、漢学における日本の主体性を発見した。支那学が漢学から独立し隆盛するにつれて、漢文教育は皮肉なことに国語教育の範疇から切り離さ

れ、逆説的にも衰退する傾向を辿った。この現象は文体の変化にも現れている。対中国意識の変化によって排漢字、排漢学論が噴出する日清戦争期において、明治の知識人たちは日本文化にとつての漢学の不可欠性を強調し、政治状況の変化に応じて漢学の新たな位置づけを確固たるものにしてしようとしている。彼らは漢学の重要性を鼓吹し、漢字熟語の常用、東洋の倫理思想教育の定着を提唱している。しかし、ここでの漢字熟語の常用は従来漢学（漢文を含む）が置かれていた学問的なイデオロギーから外れており、言語表現の用具に還元されがちでもある。漢語漢文は倫理教育の一つの〈道具〉として従来よりも国民教育に重要な位置を占めるようになったかに見えるが、漢文体が代表する言語としての価値は「我文脈」である和文脈に置き換えられ

た。文体は一方で国体と外部的合体を果たし、他方ではその内部において自己疎外を生じた。この意識の二重化によって、漢詩人として明治詩壇で活躍した大江敬香と田辺蓮舟が植民地台湾に赴く靑山衣洲に贈った「任重クシテ道遠シ」という言葉には、アンチ・シナによって具現化しえた日本の国家意識が潜んでおり、且つ日本を中心にアジアの再興を目指そうとする漢学意識も内包されていた。「任重クシテ道遠シ」という言葉が二義的に読み取られることに

よって、明治期の漢詩人たちの複雑な心理は、文体（漢文脈／和文脈）と国体（中華文化圏に属する日本／東洋の中心たる日本）との錯綜、交差する歴史を反映しているのである。一方、日本人漢詩人は植民地に赴き、日本の国威を喧伝する任務を背負っていたが、漢詩を作る際には「漢詩らしさ」を保持しようとして厳しく自戒してもいる。彼等は台湾人を「文明化」し、日本に畏服させる意思を抱いて意欲的に台湾に渡ってきたが、漢詩文という類型の伝統的規範性——「キャンオン」（中国古典）に近ければ近いほど優れた作品と評価される——を自己撞着的に意識せざるをえなかった。〈規範〉意識が国威の宣伝など政経イデオロギー現象のみに尽きるものではないことは、かえってこの漢詩文再興の全体をさらに複雑化しているのである。

本稿は、大江敬香、靑山衣洲の漢詩文意識の一端を呈示し、植民地台湾で活発化する漢詩文活動の社会的意義を解明しようとして試みた。同時代に渡台した総督府の官僚たち及びそれらと相対的な立場をとる内藤湖南の漢詩文意識もまた看過してはならないが、紙幅の都合上、今後の研究に譲りたい。

注

（一） 倉石武四郎「漢文教育の問題」（『倉石武四郎著作集

第一卷」所収、くろしお出版、一九八一年）二八四―三〇六頁。

(2) 倉石武四郎、前掲「漢文教育の問題」二九一頁。

(3) 倉石武四郎、前掲「漢文教育の問題」二八八―二八九頁。

(4) 近年、齋藤希史の主張の如く、支那学の形成は単なる西洋のシノロジーの輸入によるのではなく、漢学の内部における経義（哲学）と詩文（文学）の分離という、漢学それ自体の分化と再編成によって成立したものであるという異論も見られる。齋藤希史「支那学」の位置」（『日本思想史学』三九、二〇〇七年）三一―一〇頁。

(5) 「国分青崖の従軍」（『精美』三九、一八九四年十一月）二二―二三頁。

(6) 郭水潭「台湾日人文学概観」（『郭水潭集』所収、台南・南県文化、一九九四年）二九〇頁。

(7) 日本人漢詩人の在台文学活動の輪郭を明らかにする研究としては、楊永彬「日本領台初期日官官紳詩文唱和」（『台湾重層近代化論文集』、台北・播種者、二〇〇〇年）、胡巨川「小泉政以及《盗泉詩稿》析論」（『日治時期台湾伝統文学論文集』、台北・文津、二〇〇三年）、森岡ゆかり『近代漢詩のアジアとの邂逅』（勉誠出版、二〇〇八年）などが挙げられる。楊は植民地初期の官民唱和活動の史的考察を行い、唱和の日時、場所、及び人物を詳しく列挙して

いる。森岡は漢詩人である鈴木虎雄（一八七八―一九六三）と久保天随（一八七五―一九三四）の在台中の個人活動を綿密に考察、分析し、日本漢詩人と台湾漢詩人との交流の実相を明らかにした。橋本恭子の「南」と出会った知識人——島田謹二と明治ナシヨナリズムの研究」（『日本台湾学会第九回学術大会発表原稿、二〇〇七年六月二日）は、島田謹二が書いた「南菜園の詩人榎山衣洲」（神田喜一郎と共著）を手掛りとして、島田謹二と榎山衣洲にナシヨナリズムの栄光への喜びを感じ取るとともに、南島に引きこもった知識人の心中に憂鬱さと煩悶も潜んでいたことを指摘した。

(8) 陳培豊は日本の国学者の「漢文」文体をめぐる論議に注目し、日本の漢文と台湾の漢文の間には「同文不同調（同文でありながら読み下しが相違する）」という大きな隔たりがあるゆえ、漢文が発揮する「同化」の機能が統治者に恣意的に利用され、一旦過渡的な役割を果たした後にすぐに使い捨てられ、和歌俳句など「国民性」を代表する文学に取って代わられたことを指摘した。陳培豊「日治時期的漢詩文、国民性與皇民文学——在流通與切断過程中走向純正帰一」（『跨領域的台湾文学研究學術研討會』、台南・国家台湾文学館籌備処、二〇〇六年）参照。黄美娥の「日台間の漢文關係——殖民地時期台湾古典詩歌知識論的重構與衍異」（『近代東亞的知識生產與轉換國際學術研討會』会

議論文、東京大学主催、二〇〇六年七月二一日」と「跨界
伝播、同文交混、民族想像——頼山陽在台湾的接受史（一
八九五—一九四五）」（『台湾文学芸術與東亞現代性国際学
術研討会』、行政院文化建設委員会・政治大学台湾文学研
究所主催、二〇〇六年十一月）も漢文の同文現象に注目し
ている。前者において、黄は知識生産の角度から、「風雅」
という漢詩創作の要素が植民地時代の漢詩活動において被
植民者を同化、馴化する役割を果たしたと指摘している。
黄は後者で、ベネディクト・アンダーソンが提起した「想
像の共同体」という出版活動と各民族のナショナルリズムの
形成の相乗作用を引いて、植民地台湾における頼山陽をめ
ぐる言説と記憶の再生産が植民地における日本ナショナルリ
ズムの浸透に寄与したと指摘している。齋藤希史は日本と
台湾における漢詩文リテラシーの「同文」性に着目し、訓
読体の普及および言文一致体への転換の中に日本国内の漢
詩文が文化資本としては次第に弱体化していった、と同時
に、漢詩文は日本がはじめて同文の伝統を持つ植民地台湾
に臨んで、「一時的な活路を見出す機会」を与えてもいると
指摘している。したがって、児玉源太郎、榎山衣洲が台湾
人との漢詩文唱和を積極的に行なったことは、一方では
「同文」のポリテクニクスを借りて台湾人紳士を懐柔し、「中
華帝国の宰相」「擬似皇帝」として清国時代の封建政権の
権力体系を模倣し、彼等を新たな帝國統治の秩序へと再編

している。また他方では音声重視の口語文と国民国家の結
合によって、榎山衣洲という漢詩人の役割が次第に植民地
の舞台から消え去ることを必然的なものとする、という。
齋藤希史「『同文』のポリテクニクス」（『文学』十一六、二
〇〇九年十一月・十二月）。

(9) 明治以降の漢字、漢文論争については、井之口有一の
『明治以後の漢字政策』（日本学術振興会、一九八二年）第
一篇第一部参照。日清戦争期の排漢字言論は雑誌『太陽』
にも色濃く反映されている。第一号の三宅雪嶺の「漢字の
利害」と上田万年の「国語研究」をはじめ、漢字の字音改
革を説く言説が見られる。漢字と国語との関係をめぐる議
論はなかなか調停されず、その後の一九〇一、一九〇二年
頃にも再燃した。

(10) 湯本武比古「漢学の教育的価値」（『精美』四一、一八
九五年一月）四五頁。

(11) 湯本武比古、前掲「漢学の教育的価値」四五頁。

(12) 同右。

(13) 時代によって方向性が微妙に変わってくるが、漢文を脱
イデオロギー化する作業とその度合いは江戸時代から既に
見られる。荻生徂徠の漢文訓読意識に関する子安宣邦の指
摘は参照に値する。子安は、徂徠は漢文を読む漢文訓読の
伝統に対して、漢文を和文にしながら、むしろ和文を読ん
でしまっているのだという事態にはじめて気付き、中国語

を異質語として認識した、と指摘している。子安宣邦『漢字論——不可避の他者』（岩波書店、二〇〇三年）の第三章「他者受容と内部の形成——漢文訓読のイデオロギー」参照。

- (14) 山本の考察に従って分類すれば、言文一致の議論は、最初は前島密、西周、福地桜痴、渡辺修次郎等の論の如く、話すことと書くことの距離が啓蒙と文明化の推進に困難を与えるのに気づいたが故に文字や文体上の改革を目指す知識伝達手段の一つとして現れた。しかし、後に啓蒙重視から言文一致それ自体の必然性へ重心を移し、田口卯吉の意匠論や神田孝平の思想による言語改良論の如く、言文一致という概念が社会に定着し、思想改革による言文一致の成功を唱えるようになった。そして各段階において、議論の内容は視覚的にわかりやすい記号の使用（文字）、音声（話し言葉）との結合（文体）、国体や文化、文学のイデオロギー面の位置づけ、といういくつかの異なった次元に分かれたが、各次元が互いに錯綜しつつ、論者たちの論説に同時的かつ重層的に反映されることになった。山本正秀『近代文体発生の史的研究』（岩波書店、一九六五年）参照。
- (15) 山本正秀、前掲『近代文体発生の史的研究』三二〇頁。
- (16) 一八八五年八月から『意匠論』を発表する同時に、田口は二ヶ月前から翌年六月まで羅馬字会の機関誌『ROMAJIZASSHI』や『NIPPON KAICA NO SEISHTSU』
- (17) 山本正秀、前掲『近代文体発生の史的研究』三四六頁。
- (18) 同右、三四六一三四七頁。
- (19) 山本正秀の考察が明らかにしたように、同時期の『東洋日日新聞』の社説は、漢語の無用性に訴えて漢語・漢文体廃止論を掲げており、漢語漢文の中国的イデオロギーを強く意識する代表である。「支那語」は「外来語」であるがゆえ、日本文章の用字と文法から駆逐すべきであるという論（一八八五年七月二五日社説『文章ノ進化』）や、中国文明の後進性を意識して欧米の文明の移植を常態化する世の中に「却て其文章のみを支那たらしめんとするは、抑も如何」という論（一八八七年一月二七日社説『文章の改良』）はその類である。一方、西村茂樹は文章の高雅性から漢語漢文の価値を捉える代表である。彼は漢文を不自由な他国の文章と見て使用廃止に賛成しながら、言文一致による文章の卑俗化を終始警戒し、「品格優等」な漢文体の「片仮名交り文」の使用を推奨している。山本正秀、前掲『近代文体発生の史的研究』三三五―三三八、六八九―九六頁。
- (20) カッシーラー(Ernst Cassirer)によれば、近代科学は実体概念の関数概念への移行によって初めて成立することができたが故に、科学的認識の進むに従って実体概念は

ますます関数概念にとつて代わられるという。『哲学事典』

(平凡社、一九七一年)「実体概念」項目参照。

(21) 市村瓊次郎「中学教育における漢文の価値」(『精美』二十、一八九四年一月)四頁。

(22) 市村瓊次郎、前掲「中学教育における漢文の価値」五頁。

(23) 井上毅「漢文教育論」(『精美』二七、一八九四年四月)三頁。

(24) 井上毅、前掲「漢文教育論」三頁。

(25) 井上毅、前掲「漢文教育論」四頁。

(26) 「国文界の消息」(『帝国文学』一四、一八九五年四月)七二頁。

(27) 「国文脈」(『帝国文学』一五、一八九五年五月)六八頁。

(28) 齋藤希史「漢文脈と近代日本——もう一つのことばの世界」の第二章「国民の文体はいかに成立したのか」(日本放送出版協会、二〇〇七年)参照。ところが、漢文を不自由なものとした人々に対し、漢文を漢文のまま味わうことができる明治知識人も同時に存在した。例えば一八九三年に書かれた三宅雪嶺の『王陽明』は日本人最初の本格的な王陽明評伝である。その第三部「詞章」は雪嶺の解説の後に王陽明の詩文を返り点、送り仮名を付けずにそのまま採録していることは訓読文を経由しない漢文読者層の

存在を示唆している。小島毅『近代日本の陽明学』(講談社、二〇〇六年)七三―七四頁。

(29) 齋藤希史、前掲書、九五頁。

(30) 子安宣邦は国語の形成における漢字の役割を定義する際、漢字は国語における中国からの外来性の標識を帯びる、あるいはむしろ帯びさせられている、と明言している。漢字は「日本語にとって不可避の他者」であり、「それは自己言語がたえず外部に開かれていくことを可能にする言語的契機としての他者である」(二三二頁)という。子安の論点を踏まえるならば、日本語の主体性の形成は異質言語である中国語を受容しながら、それを他者として意識し続けるプロセスといえる。子安宣邦、前掲『漢字論——不可避の他者』参照。

(31) 敬香学人「文学界ノ遺利」(『少年之友』二二、一九一一年十月)八頁。

(32) 松本三之介「明治精神の構造」(日本放送出版協会、一九八一年)八四頁。

(33) 敬香学人「漢文ノ将来」(『少年之友』二二、一九一一年十一月)一四頁。

(34) 敬香学人「時文論」(『麗澤雑誌』三、一八九二年四月)二頁。

(35) 敬香学人、前掲「時文論」一頁。

(36) 敬香学人「時文ノ改良」(『少年之友』二二、一九一

一年十月)六頁。

(37) 敬香学人「翻訳院設立ノ議」(『学海』二一六、一八九二年二月)二頁。

(38) 敬香学人、前掲「翻訳院設立ノ議」二頁。

(39) 合山林太郎「野口寧斎の後半生——明治期漢詩人の詩業と交友圈」(『斯文』一一五、斯文会、二〇〇七年三月)。

(40) 波軒主人「明治二十七年の文学」(『精美』四一、一八九五年一月)三六頁。

(41) 敬香学人「真正ノ詩文家」(『精美』四、一八九三年五月)二頁。

(42) 敬香逸人「詩学問答録」(『精美』四一、一八九五年一月)三八頁。

(43) 敬香学人「漢詩ノ将来」(『少年之友』二一一、一八九一年十月)一一頁。彼は、「文学界ニ於テ篤志ノ士ハ依然之ヲ講究スルヲ以テ其品位ヲ高フシ寧ロ今日ノ如ク徒ラニ流行スルニ優ルモノアラシ」と強調している。

(44) 靱山衣洲の在台経歴について、神田喜一郎・島田謹二「南菜園の詩人靱山衣洲」(上)(中)(下)(『台大文学』五一四(一九四〇年十月)、五一六(一九四〇年十二月)、六一二(一九四一年五月))には詳しい。

(45) 敬香逸人「送靱山衣洲君之台湾序」(『花香月影』二二、一八九八年十一月)十六葉。

(46) 衣洲の台湾滞在を肯定する意見がある一方、いつまで

も台湾くんだりに引籠つていないで華々しく中央へ出よと

勧める者もいた。例えば西村天囚(一八六五—一九二四)もその一人で、「祇応游子與春帰、南国于今瘴氣飛」、「鶯

花不若京華好、勿滞南中着葛衣」と戒めた。神田喜一郎・島田謹二、前掲「南菜園の詩人靱山衣洲」(上)二九九頁。

(47) 神田喜一郎・島田謹二、前掲「南菜園の詩人靱山衣洲」(上)二九九頁。

(48) 蓮舟仙客田辺「復靱山衣洲書」(『花香月影』六六、一九〇一年六月)三—四葉。

(49) 西村茂樹「文章論」(『東京学士会院雑誌』六一四、一八八四年四月)。

(50) 神田喜一郎「和習談義」(『文学』三四—七、一九六六年七月)八二頁。

(51) 川口久雄は菅原道真の漢詩について、和臭の混入することをいとわずに連作していると指摘する。彼は家集の漢詩別集にある「一度は訓に、一度は音に読み、佳句になると特に朗誦せしめた」という記事に注目し、日本語の訓み下しで享受する道真の自意識が、中国詩本来の声律と対句機構に打ち込まなければいけない厳しさを失わせるのだ、と述べる(『平安朝の漢文学』吉川弘文館、一九八一年、八七—八八頁)。また、佐久節は徳川時代の漢文学に論及する場合、頼山陽の文章に対する態度は「どこまでも単に支那の模倣を以て足れりとせず、日本人の漢文たらしめよ

うといふ意気がある。即ち漢文を日本化しようと心懸けた。

故に山陽の文章にはワザと一種の和臭と見るべき字句を用ひたものもある」(八二八頁)と述べる(『徳川時代の漢文学(其一——徳川時代漢学者の文章)』、『近世日本の儒学』所収、岩波書店、一九三九年)。一方、江戸時代から幕末にかけて、日本のあやまちの有無によって漢詩らしい表現を強く意識し続けてきた日本文人たちの系譜は、中村幸彦「近世漢詩の諸問題」(中村幸彦編『近世の漢詩』所収、汲古書院、一九八六年)でも明らかにされている。

- (52) 岩溪裳川「硯凹余滴(第九)」(『精美』二一一、一八九六年一月)

- (53) 岩溪裳川、前掲「硯凹余滴(第九)」

(54) 荻生徂徠は中国式の漢詩文の創作を徹底し、「和訓を以て字義を謝る」和字、「位置上下の則を失う」和句、「語気声勢の中華に純ならざる」和習を厳しく戒めた。

- (55) 大江敬香「衣洲逸士稷山 南菜園在台北城外古亭莊己亥八月為風雨所倒頃再築告成乃借其一廡安排筆硯朝暮吟眺獲小詩六首雖拙亦紀實也」(『花香月影』四九、一九〇〇年四月)九葉。原文「南島風光。歴歴在眼。第三第五。真個漢客口吻」。

- (56) 大江敬香「衣洲逸士稷山 南菜園雜咏園在台北南門外古亭莊」(『花香月影』五三、一九〇〇年七月)。

- (57) 大江敬香「衣洲逸士稷山 疊韻寄人二首」(『花香月影』

三六、一八九九年七月)八葉。

- (58) 依田学海「田辺蓮舟 題讀試餘撰後」(『花香月影』三四、一八九九年六月)三葉。

- (59) 大江敬香「田辺蓮舟 題讀試餘撰後」(『花香月影』三四、一八九九年六月)三葉。

(60) 稷山衣洲「独坐無聊。□此□□。四□前韻」(『台湾日日新報』四九三号、一八九九年十二月二日、一面)。原文「歲晏天涯得稻栖。石池莎徑望□々。頽唐□被□車困。躋陟□歎駢路低。室淨圖書香篆繞。客階階砌草蟲啼。方知田□祝登□。鼓笛声聞橋□西」。□の箇所は原文の印字が読めない所である。

- (61) 稷山逸「評 粘舜音 南菜園訪衣洲先生敬和□韻」(『台湾日日新報』四九四号、一八九九年十二月三日、一面)。原文「一味率真。絶不佞彫琢。所謂詩中有人者是也。窓外放眼衆山低。似此意興。宜求是雌黃之外。己亥冬至節稷山逸妄批」。

- (62) 稷山衣洲「喜扇藤鶴汀見訪。次其詩韻」(『台湾日日新報』四九五号、一八九九年十二月二四日、一面)。原文「訂誤。前号衣洲詩。頽唐當作飄零。又評語雌黃。當作驪黃」。

- (63) 例として、二〇〇二年四月に台湾東海大学中国文学系主催の「日治時期台湾伝統文学學術研討会」において、台湾人研究者の間には「当時の日本が台湾人を自分より文化

的優位にたつ漢民族として認めていたかどうか」「当時の台湾人の知識水準は中華文化圏にいかん位置づけられていたのか」という問題をめぐって議論が起きた。施懿琳「従《采詩集》看台日漢詩人的互動模式與書寫話語」(東海大学中文系編『日治時期台湾伝統文学論文集』、台北・文津出版、二〇〇三年) 三六三―三九八頁とコメントーターである趙天儀の質疑(三九九頁)を参照。

付記 本稿は二〇〇九年度小林節太郎記念基金の研究助成による成果の一部である。

(名古屋大学大学院)